慶應義塾 医学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話(3353)1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　比企　能樹
毎月　１回20日発行

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●診療時間＝午前9時～午前11時
●電話＝(3353)1211(大代表)

日米医学部長対談

「臨床」「研究」に繋がる 次世代型の「医学教育」とは

慶應義塾大学医学部長　末松　誠
イリノイ大学医学部長　ディミトリ・アザール

大学医学部には「教育」「臨床」「研究」という３つの大きなミッションが課されているが、この３つが有機的に機能しあってこそ優秀な医療人材の育成はなしうる。そのような中で「医学教育」はどのようにあるべきか。本学末松医学部長とイリノイ大学医学部長の対談が実現した。

【本文は４面に掲載】

第16回慶應医学賞授賞式

授賞式の様子

慶應医学賞は1996年から始まった慶應義塾医学振興基金の主要事業の1つである。過去には本賞受賞者からノーベル賞受賞者を6名輩出しており、昨年の受賞者ジュール・A・ホフマン博士が本年ノーベル医学生理学賞を授賞されたのは記憶に新しい。

12月6日、第16回慶應医学賞受賞者であるフィリップ・A・ビーチィ博士（スタンフォード大学教授、HHMI研究員）、田中啓二博士（財団法人東京都医学総合研究所所長）を信濃町キャンパスに迎え、慶應医学賞授賞式、受賞記念講演会および記念レセプションが開催された。

医学部管弦楽団による演奏の後、須田年生教授の司会進行により開会された授賞式は、はじめに審査報告と受賞者の紹介がなされた。岡野栄之審査委員長は、ビーチィ博士は「Hedgehog遺伝子の発見とその機能解明および医学的応用」によって、田中博士は「蛋白質分解酵素複合体プロテアソームの発見と作動機構の解明」によって、学内外約80名による厳正な審査を経て選出したと報告した。

続いて清家篤塾長から、両博士に賞状とメダル、目録が授与された。清家塾長は両博士の功績を称え祝福し、この賞の意義について「受ける人の名誉であると同時に授ける側のさらに大きな名誉である」と語った。

また、来賓として城井崇文部科学大臣政務官、ジョン・V・ルース駐日米国大使より祝辞が述べられた。

記念レセプションでの両受賞者

受賞者からの挨拶でビーチィ博士は、尊敬する歴代の慶應医学賞受賞者の中に加わることが出来た事への感動を述べた。また、自身にとって科学研究は大冒険であり、多くの研究者と長年旅を共にしてきた事を嬉しく思う、今回の受賞は自分のみならず仲間全ての受賞であると話した。

田中博士は、自身における実力は実はプロテアソームの実力であり、この酵素が持つ重要性によって今日この日を迎えられた事を、人生における最大の幸運と考えていると述べた。今後も研究を続け、高齢化社会における健康社会の実現に向けて貢献したいという決意で締めくくった。

受賞記念講演会は末松誠医学部長による挨拶から始まり、満席となった会場の聴衆約280名は両博士の興味深い講演に引き込まれた。各講演後は活発な質疑応答が交わされた。

夜には記念レセプションが盛大に行われた。清家塾長、学外審査委員垣生園子教授（順天堂大学医学部）より祝福の言葉が贈られ、両博士、ビーチィ博士ご令室をはじめ、参加者は歓談に時のたつのを忘れた。

月が瀬リハビリテーションセンターを継承して

医療供給体制の地殻変動のうねり

医療法人全心会　理事長　切東　喜久夫（整60回）

本年10月1日をもって、私ども医療法人全心会が、「慶応義塾大学月が瀬リハビリテーションセンター」を継承し、「伊豆慶友病院」として新たなスタートを切る運びとなりました。私ども「全心会」の謂れは「全ては心（気）に宿る」であります。健康な心は健康な体に宿り、何物にも代えがたいその健康を保ち、更に高めていくお手伝いができればと願い、昭和62年大阪の摂津市に「摂津ひかり病院」を開院したのが始まりです。その後、医療だけでなく今日まで医療とは切り離せない介護・福祉分野にも事業を展開してまいりました。

今回の病院継承の伏線は、平成15年に、明治12年開院の「三顧堂亀谷医院」を前身とする「慶応義塾大学伊勢慶應病院」を、当法人が引き継ぎ「伊勢慶友病院」としたことに始まると思います。当時、289床の一般病院だったのを、253床の一般40床と療養213床に大転換し、南勢地域における病病連携を担う病院に切換えました。今では堂本洋一院長（特56回）の努力の甲斐もあって、山田日赤病院からの紹介患者が6割以上となっております。

伊勢のスムーズな継承と運営もあってか、今回私の整形の先輩でもある戸山芳昭常任理事（整形54回）とも何回かお会いする中で、自然と合意に至り、月が瀬を継承することになったと思います。塾館局での清家篤塾長との調印においては、改めて継承することの重責を感じましたが、塾長のお人柄や塾事務局の皆様の温かい対応に意を強くさせられました。論語の「義を見て為さざるは勇無きなり」と非力ながら、生意気にも感じたものです。月が瀬は昭和16年に塾員の福島信行、そして小嶋兼太郎両氏が土地を寄贈されたことが始まりで、昭和52年にリハセンターが開設されました。この長い施設の歴史の中で、歴代のセンター長・教授の下、我が国のリハビリテーション分野の先頭に立ち、躍進を続けてこられました。学生教育、最先端の基礎・臨床研究、そして地域医療にも貢献してこられました。その功績は多大であり、全国から患者様や医療スタッフが訪れるほどであります。そのような歴史があり、また私の母校の分院を継承させていただくこととなりましたことは誠に光栄であると同時に、非常に重責でもあると感じております。

医師派遣・確保の問題、過疎化・遠隔地という地域性・利便性の問題が遠因として、慶應は撤退を余儀なくされたのですが、このことは月が瀬に限らず、昨今いたる地方・地域で問題化しています。日本全域で大きなうねりとなって押し寄せています。防波堤の如く踏ん張り続けるのか、過疎化を容認し違う次元の対策を取るのか、これから10年以内が岐路だと思います。

戸山常任理事のご配慮で、また私の先輩でもあります矢部啓夫先生（整形53回）に院長として着任いただきました。物事に動じない姿勢は私が入局した当時と変わらず、非常に頼もしく感じております。また、慶應から残ってくれた職員は皆さん前向きで、本当に地域への貢献の原動力になってくれると感じております。

この地域の高齢化率は30%で、地域の実情に合わせ、今後は在宅も含めた医療・看護・介護を提供していきたいと思います。その為に、療養型病床への転換に向けて、病床面積や廊下幅を広くし、食堂・談話室を設けるなど、長期の療養にふさわしい環境整備が不可欠であり、現在改修工事を行なっています。

病院理念のもとに、医療従事者として日々研鑽を積みながら、医療技術と医療人としてのマインドを向上させ、周辺住民の皆様の期待する安心で安全な、そしてきめ細かな医療を提供していきたいと考えております。また病病連携・病診連携を通じてより地域に密着した病院となることを願っております。職員一同、不断の努力を重ねて参る所存でございますので、今後とも皆様方のご協力とご支援をよろしくお願い申し上げます。

なお、地域の各方面からご列席いただきました、11月10日に開催されました開院祝賀会の写真を添えております。

開院の挨拶を述べる切東喜久夫

多数の方にご参列いただいた祝賀会

第91回 慶應医学会シンポジウム

『再生医学』開催される

2011年11月11日（1並びのお目出度い日）に慶應義塾大学新棟11階大会議室、中会議室（中継）において、第91回慶應医学会シンポジウムが開催されました。今回は、総合医科学研究棟開設10周年記念シンポジウム、文部科学省再生医療実現化プロジェクトシンポジウムとの共催ということもあり、例年のシンポジウムに比し極めて盛大なものとなりました。最初に文部科学省から森口泰孝文部科学審議官がご挨拶され、この10年間に総合医科学研究棟の開設への支援、再生医学研究における慶應大学の役割と期待、再生医療への発展への期待が述べられました。次に厚生労働省から矢島鉄也技術総括審議官が再生医療研究における厚労省の取り組みと慶應大学への期待を述べられました。また、経済産業省からは川上景一審議官がiPS細胞を中心とした再生医療を産業にどう活かしてゆくか、そのために何が重要かを述べられ、慶應大学に産学連携で研究を進めて欲しいとのご挨拶を戴きました。

シンポジウムでは須田年生発生・分化生物学教授、福田恵一循環器内科学の司会のもとに先ず始めに京都大学iPS細胞研究所所長山中伸弥教授から、iPS細胞の発見から現在に至る研究の進捗状況、各国の研究状況、iPS細胞バンクの設立と現状、将来展望に関し、ユーモアたっぷりにご講演がありました。最初に論文を発表された2006年当時からiPS細胞の樹立法も大きく進展し、現在ではゲノムを壊さずにiPS細胞が樹立できるようになっていること、再生医療へ応用することが何より重要であり、京都大学、慶應大学、大阪大学、理化学研究所はその中で拠点であり、中でも慶應大学は神経再生や心臓再生、角膜再生では世界をリードして欲しいとの希望が述べられました。引き続き、私から『iPS細胞を用いた心臓の再生と心臓病の病態解明』に関し講演をいたしました。現在では血液1滴からiPS細胞が樹立できるようになったこと、心臓の発生のプログラムに添って液性因子を与えることで心筋細胞の誘導が出来ること、臨床応用に向けた心筋細胞の純化精製法、様々な細胞移植法と心嚢内視鏡の開発、遺伝性QT延長症候群を中心とした疾患iPS細胞の樹立と解析の紹介がありました。次に、理化学研究所網膜再生医療研究チームチームリーダー高橋政代先生が網膜の再生の現状と臨床応用への現況に関する講演がありました。網膜は血管がないため再生が比較的容易なこと、網膜色素変性症等で障害される脈絡膜は充分再生出来ていること、その上の視細胞も誘導できるようになっており、これらの2層の再生までは応用が間近いことが報告されました。さらに、実際の医療に向けた安全性有効性の検証の具体的方法が示されました。最後に、生理学教室の岡野栄之教授から、これまでの一連の脊髄損傷モデルにおける再生医療の現況が報告され、ことにマーモセットサルの脊髄損傷モデルにおいてその有効性がビデオを用いて紹介され、会場からは大きな歓声がありました。また、神経変性症は多数存在することが知られておりますが、多くの疾患に対してiPS細胞を樹立していること、このうちパーキンソン症候群ではその病態解明まで詳細に進んでいることが報告されました。

シンポジウムには3省からの13人の来賓を含めて学内・学外から313名の参加者があり、朝日新聞、読売新聞からの取材もありました。学外からの参加者にはかなり遠方（京都、海外の大学等）から来られた先生も多く、本テーマの重要性を示しているものと思われました。シンポジウムの終了後、4人の講演者と戸山常任理事、比企能樹三四会会長をはじめ、慶應医学会、三四会の幹部の先生方を交えた懇親会があり、京都大学、理研、慶應大学の積極的な連携により、再生医療が一日も早く実現することが重要であるとの認識で一致いたしました。

（循環器内科教授　福田恵一　62回）

好評だったポスター

平成23年度 三四会全国支部長会

平成23年度全国支部長会が、10月29日(土)ホテルオークラで開催された。司会はリー啓子副会長で、比企能樹会長による開会の辞で厳粛に幕を開けた。

挨拶では、戸山芳昭常任理事が慶應義塾の現状と新病棟建設を中心とした医学部への期待について述べた。末松誠医学部長は、慶應義塾医学部建学の精神である「基礎臨床一体型の医学・医療」を実現するための基盤として建てられた総合医科学研究棟が10年を迎え、世界に発信できる研究が育ち、基礎系と臨床系の教室が協力しながら発展している現状を報告するとともに、医学部創立100年に向けた展望を述べた。武田純三病院長は、新3号館北棟への各教室の医局および研究室の移転が完了したこと、2012年1月からの電子カルテ導入に向けての準備、3号館南棟建設の進捗状況をまじえて病院の将来構想について述べた。

次いで三四会事業報告では、吉野肇一評議員会議長が評議員会（6月18日開催）について報告し、特に若い世代の評議員の出席率向上をめざす対策が必要と述べた。古梶清和理事がホームページ（会員医療機関の登録、検索方法など）について、深川和己理事が赤倉山荘事業（10月1～2日　第6回慶應赤倉アカデミー：松本秀男スポーツ医学教授が担当）について、リー副会長が医師ワークライフ支援（11月5日　先輩医師の話を聞く会の予定など）と2011連合三田会大会（10月16日開催）について、それぞれ報告を行った。

慶應義塾大学病院の電子カルテ導入後の個人情報保護について質疑応答があった後、水野嘉夫副会長の閉会の辞で支部長会は締めくくられた。

引き続き隣室において、遠方の沖縄から出席の真喜屋浩沖縄県支部長（47回）の高らかな乾杯で懇親会が開始された。昨年に引き続いて近藤太郎理事が司会を務め、和やかに歓談が進む中、医学部・病院の新執行部からの挨拶（福田恵一医学部長補佐、天谷雅行副病院長、北川雄光副病院長、鎮目美代子副病院長）が行われた。さらに各支部会の代表から、ひとことずつ各地域における三四会の近況と活動が報告された。活発な意見交換、交流が続く中、末岡浩副会長の閉会の辞で余韻を残しつつお開きとなった。

（山上　淳　77回）

「医学部新年祝賀式」および「坂口光洋記念慶應義塾医学振興基金に基づく慶應医学賞医学研究奨励賞授賞式」の開催について（ご案内）

医学部長　末松　誠

医学部では毎年新春に教職員および三四会員による祝賀式を催しておりますが、この度、新年祝賀式を左記により開催することにいたしました。新春早々ご多用のことと存じますが、ご都合をお繰り合わせのうえ、ご出席賜りますようご案内申し上げます。

なお、本祝賀式と併せ「坂口光洋記念慶應義塾医学振興基金に基づく慶應医学賞医学研究奨励賞授賞式」を執り行います。

記

日　時　平成24年1月5日（木）13時から15時30分
場　所　新棟11階　大会議室

慶應義塾大学病院 年末年始の休診

12月30日（金）より1月4日（水）の間休診と致します

病院長

鑑賞知来

塾医学部歯科・口腔外科学教室にご縁をいただき10年が経過した。中高6年間を普通部、塾校で過ごした私にとって信濃町キャンパスは初めての地であってもどこか故郷に帰ってきたような感慨があり、歯科医療を通して少しでも義塾の役に立ちたい、〝慶應らしく〟ありたいと思ってきた。▽世界に誇る素晴らしい臨床系、基礎系の先生方、時代の要請にマッチしたリーダーと一緒に仕事ができる事、緊張感も強いが充実する毎日に感謝している。▽外来や手術にほとんど毎日朝から夕方まで忙しく診療を行っている科であるが、先日病院長より院内の〝口腔ケア〟をシステム化するようにとの指示をいただいた。これまでも、手術前のう蝕（虫歯）・歯周病の処置やそのチェック、骨髄移植患者の口腔ケア、抗がん剤使用時の口内炎や粘膜疾患への口腔ケアは行ってきており、さらに病棟患者さんへの口腔ケアを医師、看護師との連携をより深めながら行うことを計画している。マニュアル作りにも着手しており、幅広い口腔ケアのニーズに応えていきたい。現状では反映される保険点数はないという問題もあるが、DPCにおいてその貢献ができればと考えている。▽我々も勉強が必要なため公開研修会を開催したところ、他の病院からの出席者も多く北里講堂が満員になった。何百億という多数の細菌が生息する口腔内の状況が全身に与える影響が、想像よりも大きい事が最近の研究によって明らかにされてきたという背景もあり、現場の高いニーズからも注目度が大きくなっている。▽慶應大学病院歯科・口腔外科は口腔外科関連の専門医だけでなく、義歯、歯周病などの専門医がおり、総合的な歯科医療を行っている全国でも〝オンリーワン〟的な存在である。より良い口腔ケアシステムを確立することも含め、高いホスピタリティを伴った〝慶應らしい〟診療科として、精進して行きたいと思う今日この頃である。

（中川種昭　64相当）